まえがき

忘れられた原爆／原爆がよくわかった

アメリカ軍による広島・長崎への原爆攻撃は、「ヒロシマ・ナガサキ」として語り継がれている。ただし、長崎の原爆被災については、ヒロシマの陰に隠れてあまり語られることがなかった。冷戦下に、核実験による放射能や核戦争の脅威にさらされた人々は、核被害の実例として被爆体験を求めたが、それには最初の被爆地で、より大きな被害を出した広島原爆の例で十分だったのである。そのため、長崎原爆は「忘れられた原爆」となった^{〔1〕}。

一方、放射能や核戦争の脅威の実例としての原爆被害は、被爆者^{〔2〕}による証言や詳細なデータ、さらに写真、記録映像、アニメーションなどによって具体的に提示されてきた。学校での平和学習で児童・生徒たちは、それらから原爆の巨大な破壊力とそれがもたらした甚大な被害を学び、その後の感想文で原爆の悲惨さが「よくわかった」と記し、「不戦」を誓い、「核廃絶」を願ってきた。核戦争の脅威が切実に感じられ、戦争や核兵器への反対の声を広げることが喫緊の課題とされるなかではこのような学習が求められ、それがリアリティをもって受け止められていた。

しかし、冷戦の終結によって核戦争の脅威が後退していくと、原爆の話に対しては、すでに「よくわかっている」内容がくり返されるだけで、「うんざり」といった反応が多くなってきた。原爆や戦争をくり返すことがないようにという願いが込められた被爆の証言や映像、データであっても、原爆や戦争の切実性がなくなれば、「もう知っている」ことの単なるくり返しに過ぎなくなったのである。

さらに、原爆について「よくわかった」ということは、原爆が理解可能な出来事として受け止められたというところでもある。理解することができたならば、それはコントロール可能なものということにもなり、さらには利用可能なものと捉えられることにもなるだろう。しかし、原爆による被害は、これまでに「よくわかった」と言えるほど明らかにされているのだろうか。

原爆を理解するとは

これまでの「ヒロシマ・ナガサキ」の原爆被害として提示されてきた証言やデータ、映像の多くは、8月6日と9日を中心とした体験であった。しかし、その後も多くの人々は、身体的・精神的な傷を受けたまま、生活苦や不安をかかえて生きざるを得なかった。これら被爆者の健康への原爆放射能の影響については、現在も放射線影響研究所（放影研）によって調査が続けられており、被爆者の心の傷の問題が広く知られるようになったのは2000年代に入ってからのことであった。また、国は現在に至るまで原爆死した人々について詳細な調査を行っていない。そのなかで被爆者は、アメリカの核戦略とその核の傘の下に入った日本という戦後体制のもとで、放置され、差別や偏見にさらされながら沈黙を続けたが、やがて国家補償をもとめる運動や反核・平和運動、裁判闘争に立ち上がる者もあらわれ、その動きは被爆者以外の市民の間にも広まっていった。

この被爆者らの戦後は、原爆被災後も原爆が長期にわたって、あるいは生涯、被爆者に被害を及ぼし続けていることを物語っている。だからこそ、被爆者は沈黙を破って被爆の体験を語り、その責任を問うとともに、核兵

器が人類を滅亡に導くものであると警告し、そのさらなる使用を阻止しようとしてきた。したがって、この被爆者らの運動や闘争の戦後史をたどることは、いまなお続いている原爆の被害や影響を明らかにすることになる。

かつて、長崎で被爆した医師で、長崎の証言運動や反核平和運動の中心となってきた秋月辰一郎は、「一人ひとりの微細部分の証言を集めると、その原爆によって抹殺された空白が充たされ、埋まると信じ」て、「長崎の原爆記」を書き始め、さらに証言では埋めることのできない爆心の復元運動に取り組んだ³。こうして秋月が原爆で失われたものを埋めていこうとしたように、被爆者の戦後の経験を一つ一つたどっていくならば、その分だけ原爆が人や社会に及ぼした被害や影響について明らかにすることができるだろう。

ただし、被爆者らの戦後史をたどろうとしたとき、多くの記憶や記録が被爆者らの死とともに失われたことに気づかされる。占領期に、戦災者として呼ばれなかった被爆者が結成した戦災者連盟や、長崎で最初の組織化された被爆者団体である長崎原爆被災者協議会（長崎被災協）の設立時のメンバーはもうだれもいない。その当時の資料や、さらに、長崎市の原爆にかかわる行政資料の多くも、長崎原爆が「忘れられた原爆」であった間に失われてきた。

長崎原爆の戦後史をのこす会による記憶と記録の掘り起こし

原爆被災以後の長崎の復興や被爆者運動、原水禁運動などについての記録が失われ、その当時を直接知る人がいなくなっているという危機感から、私たちは、元長崎大学学長の土山秀夫氏を顧問に、長崎の証言の会代表委員の廣瀬方人氏を代表として、2013年10月に「長崎原爆の戦後史をのこす会」を設立し、原爆被災後の長崎を生きてきた方々からの聞き取りや、関連する資料の調査を開始した。その取組みは、長崎市の被爆70周年記念事業の一つに採択されたので、その補助金によって、調査結果をまとめた記録集『原爆後の七〇年――

長崎の記憶と記録を掘り起こす』を刊行した（2016年3月）。これによって、原爆被災とともに、その後も原爆の被害と影響のなかで生きてきた被爆者らの様々な戦後史を記録することができたが、資料の掘り起こしについては、人員と財源の不足から記録・整理や保存についての体制が整えられなかったため、ほとんど成果をあげることができず、課題として残された。

そこで、記録集の発刊以降も、被爆者団体や平和運動などについての聞き取り調査を継続するとともに、資料調査の実施について検討していたが、このたび、三菱財団から研究助成を受けることができたため、聞き取り調査の拡大と資料の本格的な調査に着手することができた。

こうして実施した聞き取り調査の成果は、本書の第1部に、被爆前後、被爆者5団体、被爆者運動・平和運動・平和行政、証言・記録運動、被爆者調査、平和教育の6章に分けて掲載した。各章では冒頭の「ガイド」で、その章の聞き取りの概要や特徴を紹介し、聞き取りの後に、その内容の背景となる出来事や聞き取りできなかった事項を補足した解説を掲載している。さらに、いくつかの章では内容の理解をすすめるための「コラム」を設けている。

第2部では、長崎の諸団体・機関が保存している資料についての調査状況を紹介している。保存状況の確認にとどまっているものから資料の目録制作中のもの、資料内容の分析に取りかかっているものまで様々であるが、渡辺千恵子資料と長崎被災協資料については、その内容を具体的に紹介している。これらは、長崎のみならず日本の被爆者運動の成り立ちを考える上で不可欠の資料である。第1部の各章の解説は、現在までに刊行されている書籍や利用可能な資料を参照し、聞き取りや資料整理のなかでの知見を加えてまとめたものであるが、これらの資料の整理・分析が進み、本格的に活用できるようになれば、書き換えが必要になるだろう。

原爆被災後の長崎の戦後史について、これまで語られてこなかった記憶や、しまい込まれたままの記録は、今回調査した以外にも数多く残されていると思われる。核兵器という人間のコントロールをはるかに超えた暴

力の痕跡は、まだ長崎の人と街のなかに埋もれている。本書がそれらを掘り起こすためのガイドとなることを願っている」。

新木武志

- 1 例えば、フランク・チンノックの著書『NAGASAKI: The Forgotten Bomb』(小山内宏訳『ナガサキ―忘れられた原爆』新人物往來社、1971年)。また、長崎国際文化会館館長などを勤めた松永照正は、1983年にスイスのチューリッヒラジオ局から長崎市長の平和メッセジと被爆者の証言テープの送付要請が届いたが、それは「ヒロシマはヨーロッパで大変有名であるが、長崎が被爆したことは、ほとんど知られていない」という理由であったと記している(松永照正著・発行『ナガサキよ世界へ』1987年、20、21頁)。最近では、2015年8月8日付『ニューヨーク・タイムズ』紙にスーザン・サザードが長崎原爆について寄稿した記事のタイトルが『Nagasaki's Forgotten City』となっている。
- 2 「被爆者」という呼称は、1954年3月のビキニ事件以降一般化していった(第1部第2章125頁、注3を参照)。1957年に制定された原爆医療法によって「被爆者」は、法的に定義されたが、条件を満たしながら手帳の申請をしない人もいる一方、手帳を申請しても却下される人や、被爆地域の拡大要求がおこるなど、法的な「被爆者」の枠組みは必ずしも自明なものとして受け容れられているわけではない。そのため本書では、法的な認定を拒んだり、認定を却下された原爆被災者らも含めて「被爆者」という呼称を使用している。
- 3 秋月辰一郎消滅した町と人を求めて―原爆復元・ナガサキ方式―『長崎の証言』第4集、長崎の証言刊行委員会、1972年、215頁。
- 4 長崎原爆や戦後の長崎の復興をめぐる学術研究は、近年活発化している。本書の編者らもそれぞれ長崎原爆にかかわる研究成果を発表しているが、海外でも *Resurrecting Nagasaki: Reconstruction and the Formation of Atomic Narratives*, Columbia University, 2018 (『よみがえる長崎―都市復興と原爆物語の形成』) が出版されている。同書の著者チャド・R・ティールは、別の論考で、「今こそ長崎に関心を向けて、「ヒロシマ」の陰で看過されていた言説を見直すときではなからうか」と、長崎では原爆以前の歴史が重視されてきたと指摘し、長崎原爆について向き合うことを訴えている(『ヒロシマ』の知名度の陰で忘れられたもう一つの被爆都市「ナガサキ」『証言2020 ヒロシマ・ナガサキの声』第34集、255頁、『タイム』誌2020年8月6日号からの転載)。

原爆後の75年 目次

まえがき

新木武志

002

第1部 聞き取り調査報告

1

ガイド

「被爆前後」の聞き取りについて

山口響

015

被爆前後

原爆後の西町近辺のこと

池田早苗

016

原爆後の浦上

榊安彦

022

三菱造船近くでの暮らし

森口貢

032

私の進駐軍体験

川野浩一

037

被爆後、師範学校を卒業し中学教師に

築城昭平

043

私の被爆体験と戦中・戦後

井原東洋一

048

軍国少年時代と茂木町での原爆体験

山本誠一

055

被爆前後の長崎

新木武志

058

解説

2

被爆者5団体

ガイド 「被爆者5団体」の聞き取りについて

長崎被災協の現在

被爆者相談活動の現場で

長崎原爆遺族会を受け継いで

被爆者運動、友の会

労働者として、被爆者として

長崎県被爆者手帳友愛会の活動に取り組み続けて

コラム 被爆地域の変遷と被爆者

長崎の被爆者運動と被爆者5団体

解説

新木武志

田中重光

横山照子

本田 魂 + 中村俊介

井原東洋一

川野浩一

永田直人 + 野口晃

中尾麻伊香

新木武志

070

072

080

088

094

101

107

112

114

3

被爆者運動・

平和運動・

平和行政

ガイド 「被爆者運動・平和運動・平和行政」の聞き取りについて

被爆者との出会い

被爆地域拡大運動 東長崎地区を中心に

山口響

高橋眞司

井原東洋一

130

132

139

4

証言・
記録運動

ガイド 「証言・記録運動」の聞き取りについて

「ナガサキの被爆者」の声を聴く

長崎の証言の会設立のころ

証言写真集 被爆者を撮るということ

被爆写真とともに生きて

『ドンが聞こえなかった人々』の出版

コラム 長崎の被爆証言案内

解説 長崎原爆の証言と記録

四條知恵

西村豊行

廣瀬方人

村里榮 + 黒崎晴生

深堀好敏

豆塚猛

山口響

新木武志

186

188

199

203

217

223

229

233

解説

反核・平和運動と長崎市

長崎の被爆遺構に向き合って

平和行政の始まりに立ち会う

被爆「体験者」とともに闘う

被爆未指定地域からの被爆者運動

山本誠一

本田孝也

田崎昇

中村明俊

新木武志

145

152

159

167

174

5 被爆者調査

ガイド 「被爆者調査」の聞き取りについて	中尾麻伊香	246
被爆体験とABC職員としての日々	大串康隆	248
終わらない原爆後障害とともに	朝長万左男	253
被爆者のデータ解析と資料保存に携わって	三根眞理子	262
長崎での被爆者調査に参加して	濱谷正晴	267
長崎での被爆者調査と平和研究	高橋眞司	274
解説 長崎の被爆者調査	新木武志	279

6 平和教育運動

ガイド 「平和教育運動」の聞き取りについて	山口響	291
被爆教師の会を設立する	築城昭平	292
教科教育と平和教育	森口正彦	299
解説 長崎の平和教育運動	新木武志	307

第2部 資料調査報告

1 資料調査

第2部 資料調査報告の概要	320
アンケートまとめ 長崎の団体が所蔵する資料	322
長崎原爆資料館	330
爆心地復元の原資料 浦上キリシタン資料館の場合〔岩波智代子〕	338
岡まさはる記念長崎平和資料館〔崎山昇〕	344
長崎県被爆者手帳友の会	348
長崎市婦人会〔国武雅子〕	349
真宗大谷派九州教区長崎教務支所	354
渡辺千恵子氏関係資料の紹介 1950年代中期 第2回原水禁世界大会前後	358
長崎原爆被災者協議会資料調査の現状 資料紹介をかねて	384
鎌田・川崎資料	396
内田伯資料	398

2 主な資料群

あとがき	木永勝也	403
編者略歴		415
索引		414